

科目名	単位数	指導学年・類・型	必修・選択
教 義	2	3年 1・3類	必 修
授業担当者		教科書名	副教材等
****		稿本天理教教祖伝	稿本天理教教祖伝逸話篇

<p>科目の到達目標</p> <p>「稿本天理教教祖伝」を拝読してこれを学ぶことにより、「月日のやしろ」である教祖が50年にわたり身をもってお示し下された「ひながた」に接し、世界一れつの人間をたすける為におかけ下さる教祖の「親心」を認識する。さらにその「ひながた」を私たち人間一人一人が日々迎えることこそ、本教信仰の目標であり「陽気ぐらし世界」の実現に向かう道であることを学ぶ。</p> <p>(但し、第8章については内容が「おふでさき」の事についてであり、2年次に授業を行ったものとして省略する。)</p>
--

<p>評価の観点と方法について</p> <p>教祖がお通り下され、お示し下された「ひながた」をただ史実として理解するのではなく、その「ひながた」を通して世界たすけの実現を思召される教祖の親心を感じる。さらに、「ひながた」を日々の生活の中で如何にして実践することができるかを考える。</p> <p>学期末考査《70点》と平常点（ノート・夏期課題などの提出物、授業中の態度等）《30点》により総合的に評価する。</p>
---

	月	学習単元・項目	学習のねらい	具体的な学習内容と方法	評価のポイント
一 学 期	4	<ul style="list-style-type: none"> <li>*「教祖傳」の概説</li> <li>*第1章「月日のやしろ」</li> <li>・立教に至るまで</li> <li>・最初の啓示</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>*「教祖傳」を学ぶ上での態度。</li> <li>*教祖が「月日のやしろ」になられた経緯を学び、教祖のお立場を明確に理解せる。</li> <li>・啓示の内容を理解する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>*「ひながた」の意味。“稿本はしがき”の説明や全体の流れ。</li> <li>*天保8年からの中山家における出来事。(中山家の家系など)</li> <li>・親神様のお言葉(啓示)の解説。(1年次の復習も含む)</li> <li>・あらゆる人間思案を取り去ること。→信仰の第一歩。</li> <li>・「おふでさき」の解説と「ひながたの親」について。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>*「ひながた」を迎えることの重要性</li> <li>・啓示の意味と親神様の働き</li> <li>・親神様の思いに添い切ること</li> <li>・「月日のやしろ」の理解</li> </ul>
	5	<ul style="list-style-type: none"> <li>・立教</li> <li>・教祖のお立場</li> <li>*第2章「生い立ち」</li> <li>・ご幼少のころ</li> <li>・中山家への引き寄せ(ご入嫁)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・立教のひながた的意味合い。</li> <li>・「月日のやしろ」の理解。</li> <li>*天保9年以前の教祖の歩まれた道すがらを学ぶ。</li> <li>・立教へ向かう親神様のお働き。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>*「魂のいんねん」ある教祖がお通り下された、立教までの道すがらを学ぶ。</li> <li>・「魂のいんねん」ある教祖が「やしきのいんねん」ある元の屋敷へと引き寄せられた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>*人間中山みき様の道すがらである。</li> <li>・「立教の3大いんねん」の確認。</li> </ul>
	6	<ul style="list-style-type: none"> <li>*第3章「みちすがら」</li> <li>・「貧に落ち切れ」</li> <li>・嘉永6年</li> <li>・をびやゆるし</li> <li>・貧の谷底</li> <li>・たすけの道明け</li> <li>*第4章「つとめ場所」</li> <li>・つとめ場所のふしん</li> <li>・大和神社のふし</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>*天保9年の立教から、教祖が先ずなされた事は何か。そこから元治元年までの約25年間の教祖の道すがらを学び、教祖が「月日のやしろ」であることを、再度明確にする。</li> <li>・後の高弟達の入信とさづけ。</li> <li>*つとめ場所のふしんを通して、本教のふしんの在り方を学ぶ。</li> <li>・「ふし」の意味を確認する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「陽気ぐらし」の意味を理解する。「物」→「心」</li> <li>・「世界たすけ」の門出の年。「おやしき」の3つのできごと。</li> <li>・人間創造の親としての「たすけ」である。</li> <li>・「貧に落ち切れ」ところに、初めて見えてくる親神様のご守護。</li> <li>・親神様によるお引き寄せ。素直な信仰心。「さづけ」→「道の路金」</li> <li>*飯降伊蔵様の入信(「大工が出てくる、〜。」)→ご守護に対する喜び、お礼の心(心のふしん)→つとめ場所のふしん(形のふしん)</li> <li>・「ふしん」による勇んだ心→教祖のお言葉を素直に通る→「ふし」に直面→「神一条の精神」(ひのきしん)→「ふしん」の完成(心のふしん)</li> <li>・「助造事件」に対する教祖のご態度→内に対する厳しいお姿。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>*天保9年以降の教祖のみちすがらを「ひながた」という。</li> <li>・「心の明るさ」=「陽気ぐらし」</li> <li>・親神様にもたれ切る心。</li> <li>・「貧に落ち切れ」の意味の確認。</li> <li>・「ようぼく」の心と使命。</li> <li>*「ふしん」の意味と「つとめ場所」の意義。</li> <li>・「ひのきしん」の態度</li> </ul>
	7	<ul style="list-style-type: none"> <li>・反対攻撃と邪説</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「ぢばの理」(教えの根本)</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>・「ぢばの理」の確認。</li> </ul>

	月	学習単元・項目	学習のねらい	具体的な学習内容と方法	評価のポイント
二 学 期	9	*第5章「たすけつとめ」 ・つとめの理	*「みかぐらうた」の特色や作成の背景を学び、「つとめの理」を明確に理解する。	*「かぐら」と「てをどり」にこもる教祖の思い。 ・「理の歌や」「理を振るのや」	*「つとめ」の意味と教祖の思い。 ・「元の理」の理解。
	10	*第6章「ちば定め」 ・おふでさきご執筆 ・つとめの急込み ・高山たすけ ・「月日」の働き ・ちば定め ・つとめ人衆への仕込み ・いちれつきょうだい	*「おふでさき」の台となっている出来事を辿り、「つとめ」と関連していることを知る。また、高山たすけを宣言され、その第1歩を踏み出されたのが教祖自身であった事を確認 ・世界たすけの実現に欠くことの出来ない「元のちば」である。 ・どこまでも神一条であること。 ・人間創造の親である親神様の思召	*「みかぐらうた」ご作成年代と、「おふでさき」ご執筆年代。 ・秀司様の結婚→「つとめ人衆」の引き寄せ・神一条の心。 ・「かぐらつとめ」の文度→「かんろだいの雛型」、「かぐら面」 ・「大和神社のふし」、「山村御殿のふし」→「奈良中教院」から呼び出し ・「赤衣」、「証拠守り」、「さづけ」→世界たすけの実現へ。 ・「ちば定め」の方法・・教祖よりお言葉を頂く→人々が素直にそのまま実行→人間創造の「元のちば」をお教え頂く。 ・こかん様の出直し→人間思案の心 ・「いちれつきょうだい」、「かしもの・かりもの」	*「おふでさき」を誌される親心と、「つとめ」によるたすけの実現。 ・1日も早く世界たすけを待ち望まれる思い。 ・今現在の教祖のご守護を確認。 ・教祖を信じて通ることがたすけの元であること。 ・親神様の思召しが何であるのか。 ・「かしもの・かりもの」の自覚。
	11	*第7章「ふしから芽が出る」 ・「講を結べ」 ・転輪王講社 ・かんろだいの石普請	*教祖が求められた「講」と、秀司様が結講した「転輪王講社」との違いはどこにあるのか。かんろだいの石普請と、その頓座の意味を知る。	*「ふしから芽が出る」と仰せられる意味。(当時のおやしきの様子から) ・「講」＝信仰する者が、お互い心一つにして「おつとめ」をつとめて更に信心を深めるもの。 ・「陽気ぐらし世界実現」を目指される教祖の思召し。	*「ふし」＝より一層成人した姿へとお導き下さるもの。 ・「ふしん」の意味。
	12	*第9章「御苦労」 ・かんろだいの石取り払い ・毎日つとめ ・雨をづとめ ・教会公認運動 ・最後の御苦労	*「御苦労」を通して教祖が先頭に立って「つとめ」を急込まれた反面、御高齢の教祖を思う一念から応法の道(教会公認)を急ぐ子供達の姿を知る。	*当時の歴史的状況(明治政府の宗教政策)にも言及して、教祖の御苦労を間近に道を歩まれた側近の方々との苦悩と、人々を神一条の心へとお導き下さる教祖の親心。 ・親神様の自由自在のご守護→「雨降るも神、降らぬも神の自由」 ・神道本局へ提出した「5箇条の御請書」-「ひながたの道を通らねばひながた要らん」	*どこまでも神一条の心を求められる教祖→たすけの実現 ・神一条の心→人間思案の姿を一掃 ・「つとめ」=よろづたすけ ・明治政府の宗教政策の理解。 ・教祖の親心(世界いちれつの親)
三 学 期	1	*第10章「扉ひらいて」 ・世界の動くしるし ・「月日」がありてこの世界あり ・「扉ひらいて」 ・教祖存命の理 *三年間のまとめ	・「ひながたの親」の確認 *ご自身の身上にしろしを見せ「つとめ」を急込まれる教祖の「おさしづ」を通して、当時の人々が命懸けの「つとめ」にとりかかった、明治20年陰暦正月26日を考える。  *卒業する生徒たちへよふぼくとしてこれだけは心に持っていてほしい心構え等、三年間で学ばせていただいた教えをもう一度振り返る	*刻々とお出し下さる「おさしづ」によって伝えられる「親の思い」に、何とかお応えしたいと思う反面、教祖のお身上を気遣う人々の思い。 ・「律ありても心定めが第一やで」→「つとめ」を実施。 ・親の思いに添い切る(神一条の心)→世界たすけの働きが始まる。 ・「つとめ」と「さづけ」によるたすけの実現。  *おさづけの理拝戴後の心構えやおさづけの取次ぎ、また人々をたすけることの実践の促し等。 三年間教義を学んでこれだけは覚えてほしい事を復習する。	*教祖のお身上＝「つとめ」の急込み→教祖の御苦労 ・世界の成り立ちの順序 ・「子供可愛い故」(親心) ・「教祖存命の理」の認識 *人をたすけることの実践や決意表明。
	2				

### その他 (履修上の留意点)

教祖の「ひながた」こそ、この教えを信仰する者の歩むべき道である。従って、私たちは常に教祖と身近に接して日々を通らせて頂かねばならない。将来の「ようぼく」として一歩でも教祖のお心に近づくことができるよう、そして「ひながた」を実践出来るよう心掛けてもらいたい。

授業にグループワークを取り入れ、日常生活に教えを活かす契機になるよう進める。

科目名	単位数	指導学年・類・型	必修・選択
教 義	2	3年 2類	必 修
授業担当者		教科書名	副教材等
****		稿本天理教教祖伝	稿本天理教教祖伝逸話篇

<p>科目の到達目標</p> <p>「稿本天理教教祖伝」を拝読してこれを学ぶことにより、「月日のやしろ」である教祖が50年にわたり身をもってお示し下された「ひながた」に接し、世界一れつの人間をたすける為におかけ下さる教祖の「親心」を認識する。さらにその「ひながた」を私たち人間一人一人が日々迎えることこそ、本教信仰の目標であり「陽気ぐらし世界」の実現に向かう道であることを学ぶ。</p> <p>(但し、第8章については内容が「おふでさき」の事についてであり、2年次に行ったものとして省略する。)</p>
---

<p>評価の観点と方法について</p> <p>教祖がお通り下され、お示し下された「ひながた」をただ史実として理解するのではなく、その「ひながた」を通して世界たすけの実現を思召される教祖の親心を感じる。さらに、「ひながた」を日々の生活の中で如何にして実践することが出来るかを、自分自身の事としてとらえ考えること。</p> <p>学期末考査《70点》と平常点（ノート・夏期課題などの提出物、授業中の態度等）《30点》により総合的に評価する。</p>
--

	月	学習単元・項目	学習のねらい	具体的な学習内容と方法	評価のポイント
一 学 期	4	<ul style="list-style-type: none"> <li>*「教祖傳」の概説</li> <li>*第1章「月日のやしろ」</li> <li>・立教に至るまで</li> <li>・最初の啓示</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>*「教祖傳」を学ぶ上での態度。</li> <li>*教祖が「月日のやしろ」になられた経緯を学び、教祖のお立場を明確に理解せる。</li> <li>・啓示の内容を理解する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>*「ひながた」の意味。「稿本はしがき」の説明や全体の流れ。</li> <li>*天保8年からの中山家における出来事。(中山家の家系など)</li> <li>・親神様のお言葉(啓示)の解説。(1年次の復習も含む)</li> <li>・あらゆる人間思案を取り去ること。→信仰の第一歩。</li> <li>・「おふでさき」の解説と「ひながたの親」について。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>*「ひながた」を迎えることの重要性</li> <li>・啓示の意味と親神様の働き</li> <li>・親神様の思いに添い切ること</li> <li>・「月日のやしろ」の理解</li> </ul>
	5	<ul style="list-style-type: none"> <li>・立教</li> <li>・教祖のお立場</li> <li>*第2章「生い立ち」</li> <li>・ご幼少のころ</li> <li>・中山家への引き寄せ(ご入嫁)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・立教のひながた的意味合い。</li> <li>・「月日のやしろ」の理解。</li> <li>*天保9年以前の教祖の歩まれた道すがらを学ぶ。</li> <li>・立教へ向かう親神様のお働き。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>*「魂のいんねん」ある教祖がお通り下された、立教までの道すがらを学ぶ。</li> <li>・「魂のいんねん」ある教祖が「やしきのいんねん」ある元の屋敷へと引き寄せられた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>*人間中山みき様の道すがらである。</li> <li>・「立教の3大いんねん」の確認。</li> </ul>
	6	<ul style="list-style-type: none"> <li>*第3章「みちすがら」</li> <li>・「貧に落ち切れ」</li> <li>・嘉永6年</li> <li>・をびやゆるし</li> <li>・貧の谷底</li> <li>・たすけの道明け</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>*天保9年の立教から、教祖が先ずなされた事は何か。そこから元治元年までの約25年間の教祖の道すがらを学び、教祖が「月日のやしろ」であることを、再度明確にする。</li> <li>・後の高弟達の入信とさづけ。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・陽気ぐらしの意味を理解する。「物」→「心」</li> <li>・「世界たすけ」の門出の年。「おやしき」の3つのできごと。</li> <li>・人間創造の親としての「たすけ」である。</li> <li>・「貧に落ち切れ」ところに、初めて見えてくる親神様のご守護。</li> <li>・親神様によるお引き寄せ。素直な信仰心。「さづけ」→「道の路金」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>*天保9年以降の教祖のみちすがらを「ひながた」という。</li> <li>・「心の明るさ」=「陽気ぐらし」</li> <li>・親神様にもたれ切る心。</li> <li>・「貧に落ち切れ」の意味の確認。</li> <li>・「ようぼく」の心と使命。</li> </ul>
	7	<ul style="list-style-type: none"> <li>*第4章「つとめ場所」</li> <li>・つとめ場所のふしん</li> <li>・大和神社のふし</li> <li>・反対攻撃と邪説</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>*つとめ場所のふしんを通して、本教のふしんの在り方を学ぶ。</li> <li>・「ふし」の意味を確認する。</li> <li>・「ぢばの理」(教えの根本)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>*飯降伊蔵様の入信(「大工が出てくる、〜。」)→ご守護に対する喜び、お礼の心(心のふしん)→つとめ場所のふしん(形のふしん)</li> <li>・「ふしん」による勇んだ心→教祖のお言葉を素直に通る→「ふし」に直面→「神一条の精神」(ひのきしん)→「ふしん」の完成(心のふしん)</li> <li>・「助造事件」に対する教祖のご態度→内に対する厳しいお姿。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>*「ふしん」の意味と「つとめ場所」の意義。</li> <li>・「ひのきしん」の態度</li> <li>・「ぢばの理」の確認。</li> </ul>

	月	学習単元・項目	学習のねらい	具体的な学習内容と方法	評価のポイント
二 学 期	9	*第5章「たすけつとめ」 ・つとめの理  ・神祇管領への公認  *第6章「ちば定め」 ・おふでさきご執筆 ・つとめの急込み ・高山たすけ ・「月日」の働き ・ちば定め  ・つとめ人衆への仕込み ・いちれつきょうだい	*「みかぐらうた」の特色や作成の背景を学び、「つとめの理」を明確に理解する。 ・「つとめの実施」→神一条の心  *「おふでさき」の台となっている出来事を辿り、「つとめ」と関連していることを知る。また、高山たすけを宣言され、その第1歩を踏み出されたのが教祖自身であった事を確認 ・世界たすけの実現に欠くことのない「元のちば」である。 ・どこまでも神一条であること。 ・人間創造の親である親神様の思召	*「かぐら」と「てをどり」にこもる教祖の思い。 ・「理の歌や」「理を振るのや」  ・「吉田家も偉いようなれども、一の枝の如きものや。枯れる時ある。」  *「みかぐらうた」ご作成年代と、「おふでさき」ご執筆年代。 ・秀司様の結婚→「つとめ人衆」の引き寄せ・神一条の心。 ・「かぐらつとめ」の支度→「かんろだいの雛型」、「かぐら面」 ・「大和神社のふし」、「山村御殿のふし」→「奈良中教院」から呼び出し ・「赤衣」、「証拠守り」、「さづけ」→世界たすけの実現へ。 ・「ちば定め」の方法・教祖よりお言葉を頂く→人々が素直にそのまま実行→人間創造の「元のちば」をお教え頂く。 ・こかん様の出直し→人間思案の心 ・「いちれつきょうだい」、「かしもの・かりもの」	*「つとめ」の意味と教祖の思い。 ・「元の理」の理解。  ・「つとめ」に対する反対・攻撃。  *「おふでさき」を誌される親心と、「つとめ」によるたすけの実現。 ・1日も早く世界たすけを待ち望まれる思い。 ・今現在の教祖のご守護を確認。 ・教祖を信じて通ることがたすけの元であること。 ・親神様の思召しが何であるのか。 ・「かしもの・かりもの」の自覚。
	10	*第7章「ふしから芽が出る」 ・「講を結べ」 ・転輪王講社 ・かんろだいの石普請	*教祖が求められた「講」と、秀司様が結講した「転輪王講社」との違いはどこにあるのか。かんろだいの石普請と、その頓座の意味を知る。	*「ふしから芽が出る」と仰せられる意味。(当時のおやしきの様子から) ・「講」＝信仰する者が、お互い心一つにして「おつとめ」をつとめて更に信心を深めるもの。 ・「陽気ぐらし世界実現」を目指される教祖の思召し。	*「ふし」＝より一層成人した姿へと お導き下さるもの。 ・現在の教会との違い。 ・「ふしん」の意味とひのきしん。
	11	*第9章「御苦労」 ・かんろだいの石取り払い ・毎日つとめ ・雨をづとめ ・教会公認運動 ・最後の御苦労  *第10章「扉ひらいて」 ・世界の動くし ・「月日がありてこの世界あり」 ・「扉ひらいて」 ・教祖存命の理  *三年間のまとめ	*「御苦労」を通して教祖が先頭に立って「つとめ」を急込まれた反面、御高齡の教祖を思う一念から応法の道(教会公認)を急ぐ子供達の姿を知る。 ・「ひながたの親」の確認 *ご自身の身上にするしを見せて「つとめ」を急込まれる教祖の「おさしづ」を通して、当時の人々が命懸けの「つとめ」にとりかかった、明治20年陰暦正月26日を考える。  *卒業する生徒たちへよぼうくとしてこれだけは心に持っていてほしい心構え等、三年間で学ばせていただいた教えをもう一度振り返る	*当時の歴史的状況(明治政府の宗教政策)にも言及して、教祖の御苦労を間近に道を歩まれた側近の方々の苦悩と、人々を神一条の心へとお導き下さる教祖の親心。 ・親神様の自由自在のご守護→「雨降るも神、降らぬも神の自由」 ・神道本局へ提出した「5箇条の御請書」-「ひながたの道を通らねばひながた要らん」 *刻々とお出し下さる「おさしづ」によって伝えられる「親の思い」に、何とかお応えしたいと思う反面、教祖のお身上を氣遣う人々の思い。 ・「律ありても心定めが第一やで」→「つとめ」を実施。 ・親の思いに添い切る(神一条の心)→世界たすけの働きが始まる。 ・「つとめ」と「さづけ」によるたすけの実現。	*どこまでも神一条の心を求められる教祖→たすけの実現 ・神一条の心→人間思案の姿を一掃 ・「つとめ」=よろづたすけ ・明治政府の宗教政策の理解。 ・教祖の親心(世界いちれつの親) *教祖のお身上=「つとめ」の急込み→教祖の御苦労 ・世界の成り立ちの順序 ・「子供可愛い故」(親心) ・「教祖存命の理」の認識
	12			*おさづけの理拝戴後の心構えやおさづけの取次ぎ、また人々をたすけることの実践の促し等。 三年間教義を学んでこれだけは覚えてほしい事を復習する。	*人をたすけることの実践や決意表明。
	1				
	2				

その他 ( 履修上の留意点 )

教祖の「ひながた」こそ、この教えを信仰する者の歩むべき道である。従って、私たちは常に教祖と身近に接して日々を通らせて頂かねばならない。将来の「よぼうく」として一歩でも教祖のお心に近づくことが出来るよう、そして「ひながた」を実践出来るよう心掛けてもらいたい。